

日本リメディアル教育学会第6回大会

メインシンポジウム『高大接続問題と学士力を保障する大学教育』

質問項目への回答

第6回全国大会のメインシンポジウム（2010年8月30日）は、河本敏浩、佐々木隆生両先生の講演と赤堀侃司先生の指定討論により大きな関心を呼び、熱の入った議論に400名近い参加者が聴き入りました。一般参加者からの質疑・応答も活発に行われました。

終了後に参加者から提出された「アンケート」での意見や質問を元に、司会の谷川と実行委員長水町が協議して11項目の質問にまとめ、3先生から御回答を頂戴しました。以下に質問項目と御回答を記します。

谷川 裕稔， 水町 龍一

質問項目

A. 教育全般について： 河本先生にご回答いただきました。

[Q1] 初等・中等教育を含めた日本の教育全般について、再検討の必要はないでしょうか。

[Q2] 高校入学時には、学力の最低保障は必要ないでしょうか。

B. 高大接続テストについて（「仮称」を省く）： 佐々木先生にご回答いただきました

[Q3] 低偏差値大学にとって高大接続テストはどんな意味があるのでしょうか。また、どのような使い方が可能とお考えでしょうか。

[Q4] 高大接続テストは、高校の序列化を推し進める事にならないでしょうか。また、総合科、専門科や通信制高校などでは対応できない高校が出てこないでしょうか。

[Q5] 高大接続テストの基準や作問は、適切にできるのでしょうか。指導要領の揺れや、実利主義の専横に対抗できるのでしょうか。

[Q6] 国家管理でテストを行うことのリスクは大丈夫でしょうか。

[Q7] 障がい者の受験は保証されるのでしょうか。

C. 大学教育について： 赤堀先生にご回答いただきました。

[Q8] 学士力を具体的に身につける方法は、何でしょうか。

[Q9] 学生が身につけるべき学習スキルには、どんなものがありますか。

[Q10] 学生が夢・目標を持ち、学習習慣・学習スキルを培い、人間力を身につけるには、大学教員は現実には何をすれば良いとお考えでしょうか。

[Q11] 夢や学習習慣を持つ学生は、概ね基礎学力も高く、低偏差値大学には来ない場合が多いといわれます。そういう大学では、何ができるのでしょうか。

回答

河本敏浩（社団法人全国学力研究会理事長）

[Q1] 初等・中等教育を含めた日本の教育全般について、再検討の必要はないでしょうか。

[回答] 初等・中等教育を含めた日本の教育全般について、再検討の必要はないでしょうか。もちろん必要です。学校が学びの場であるならば、その習得の度合いを確認することは極めて重要だと思います。特に収入の二極化が今後ますます深刻化するとしたら、学費等の社会的支援と学びの場たる学校の意義と役割の再確認は必須だと思います。

[Q2] 高校入学時には、学力の最低保障は必要ないでしょうか。

[回答] 厳密な数値を課して高校の進学条件にすることは賛成しませんが、少なくとも中学在学時には、学力が低位にある生徒に対して手厚い補助があつてしかるべきだと思います。つまり学力の最低保障は無理だとしても、最低限の学力を身に付けることが保障されるような支援政策が必要だと思います。

佐々木隆生（北海道大学公共政策大学院教授）

[Q3] 低偏差値大学にとって高大接続テストはどんな意味があるのでしょうか。また、どのような使い方が可能とお考えでしょうか。

[回答] 「低偏差値大学」では、一方では高大接続テストに基づく高校での基礎的教科・科目の学習を期待できることとなります。他方、選抜にあたっては、どの程度の学力があるかが明確になりますし、どの科目が得意なのかも分かります。そこで、AOや推薦入試のベースを確保できます。資格入学みたいにミニマム・リクワイアメントを示すことも可能となります。

[Q4] 高大接続テストは、高校の序列化を押し進める事にならないでしょうか。また、総合科、専門科や通信制高校などでは対応できない高校が出てこないでしょうか。

[回答] <報告書リから抜き書きしたものをお送りします>

「共通テストの導入には、常に「序列化」とそれに基づく過大な競争への懸念が指摘される。戦前の旧制高校への共通テストが挫折した要因の一つはそこにあったし、また共通第1次学力試験にもそうした批判が向けられた。「高大接続テスト（仮称）」にも同様の懸念に基づく異議が生じる可能性がある。だが、そうした懸念に基づいて「高大接続テスト（仮称）」を批判するのには問題がある。

第1に、「高大接続テスト（仮称）」は、その目的と機能からして、序列化や得点競争を促進する性格をもたないことに留意するべきである。基礎的教科・科目の達成度を測るこ

と、それに基づいて、他の能力や資質を十分見るような方向での大学の入学者選抜改革を目的とするからである。無論、したがって、後に述べるが、1点刻みの点差による競争をもたらしさないような方式を採用することが要請される。

第2に、共通テストが一定の学力差を明らかにすること自体は避けることができない。だが、それ自体が「序列化」や「過当な競争」をもたらすというのは論理的な飛躍である。テストが学力把握の手段であり、教育上の手段であることまでも否定はできないであろう。無論、テストにのみ依存して学習を強制することは避けるべきであるが、それは教育方法の問題領域に属する。

第3に、大学や高校にそれ自体種々の尺度での「序列」あるいは「機能分化」などが存在する。「序列」を批判するメディアや教育界自身も「難関大学への合格者数」や「大学ランキング付け」に影響を受け、偏差値を重点にした指標によって進学が左右されている状態は周知の通りである。したがって、「高大接続テスト（仮称）」が偏差値にのみ依拠してきた状況を変え、「落とすための入試」から「とるための入試」への接近をもたらしたとしても、一定の順位付けが教育機関についてなされている限り、また生徒の自由な進学志望を確保する限り、一定の「序列化」は避けられないであろう。また、「序列化」がテストそれ自体によって生じているのではなく、教育・研究の成果、財政的基盤、社会的な慣行など実に多くの要因を起源としていることを看過してはならない。問題は、不必要な「序列」意識をもたらすような制度をいかに避けるかにある。」

「これまで述べたことから明らかなように、「高大接続テスト（仮称）」が構築・導入されるならば、また大学の入学者選抜がそれを基礎として改革されるならば、高校では、入学試験に合格することを目標とするのではなく、高大接続を展望した基礎的教科・科目の教育が、つまり普通教育の達成を共通の目標とした教育が展開可能となる。仮に、一部の大学・学部で高度な選抜試験がなされるとしても、「高大接続テスト（仮称）」を参照基準とした目標達成を実現し、その上でより高度なレベルの選抜試験の準備に生徒の勉学を向かわせることが可能となる。高校教育が多様な個別の大学入試や選抜方式に翻弄されたり、また大学の選抜に高校教育が直接に規定されることを回避することが相当程度可能となる。

なお、専門高校については、全国工業高等学校長協会が「工業科標準テスト」を、また国立高等専門学校では「国立高等専門学校学習到達度試験」を第3学年で実施している。いずれも専門学科の教育特性に対応した共通の学力把握を追求したものであり、総合学科や専門学科との高大接続については、学科共通の学力把握とならんでこのような各学科に関する学力把握や高校で実施されている資格試験の成績などを積極的に利活用することが望ましい。今日では工業高校から大学の工学部へ、また商業高校から経営学部、商学部、経済学部等に進学する比率は30%前後に達しているが、そのような進学経路を共通の学力把握の上に制度化することが要請されている。」

1) 佐々木隆生，経過報告「高大接続テスト（仮称）」，その必要性・性格・特徴について
—協議・研究の現段階—，平成22年5月25日

[Q5] 高大接続テストの基準や作問は、適切にできるのでしょうか。指導要領の揺れや、実利主義の専横に対抗できるのでしょうか。

[回答] 高大接続テストをIRTでやるとすれば、現在のセンター試験の作題よりもはるかに容易になります。第1に、センターの過去の問題を、回答データを参照して標準的な問題にすることができますし、第2に、試行テストなどを含めて問題プールが蓄積されればされるほど安定化します。指導要領の揺れに対しては、センターでも工夫しているのですが、高大関係者が協力して安定的な教科・科目の範囲と水準を示すことになります。「実利主義の専横」についてはご質問の意味が明確でないのでお答えしかねます。多分、報告を読んでいただければ関連することが書いてあるかと思います。

[Q6] 国家管理でテストを行うことのリスクは大丈夫でしょうか。

[回答] 国家管理でやるとは決めていません。必要なのはどの国でもそうですが、テストの専門機関が実施主体となることです。政府がやるか民間がやるかは別にして、こうしたテストは公共的性格をもちますので、そのことだけは明確にする必要があります。もし、テストを通じての教育の国家管理を心配されるのであれば、テストの実施主体と体制は高大関係者によって構築されるべきだと報告には示してあります。他方、民間がやる場合ですが、それこそ公共的性格が担保されない可能性があることをご理解ください。

[Q7] 障がい者の受験は保証されるのでしょうか。

[回答] ハンディキャップを負った人々にもセンター試験は配慮しています。高大接続テストも同様の措置が必要と思っています。

赤堀侃司（白鷗大学教育学部教授）

[Q8] 学士力を具体的に身につける方法は、何でしょうか。

[回答] 課題をベースにした学習スタイルがいいと思っています。例えば OECD が提唱している AHERO（22歳~26歳対象）は、大学レベルの学力を想定した、大学版 PISA と呼ばれていますが、そこで求められている学力は、知識や技能を含みますが、それ以外のリテラシー、コミュニケーション、課題解決能力などを重視しており、これらは、PISA(15歳対象)、PIAAC（16歳~65歳対象）などとも共通する内容です。学士力も、小中高等学校の教育理念である「生きる力」も、PISA、AHERO、PIAACなども、OECD のキーコンピテンシーをベースにしていますが、そこでは、コンピテンシー、つまり世の中に出ても通じる能力を重視しています。そこで、大学では、課題をベースにした PBL 型の学習方法が適していると思います。

[Q9] 学生が身につけるべき学習スキルには、どんなものがありますか。

[回答] 学習スキルについて、私は、行動レベル、認知レベル、メタ認知レベルに分類して、議論していますが、一般的には、大学ではメタ認知レベルを習得してほしいと思っています。ちなみに、以下に私の分類する学習スキルを示しますが、内容は説明しなくても、わかると思います。

学習スキルの分類 (赤堀、2010年)

行動レベル

聞くスキル	授業中などで先生や生徒の話を聞くなど
書くスキル	ノートテイキングなど
話すスキル	発表やプレゼンテーションなど
集団行動スキル	合唱や集団行動など
操作スキル	実験の手順の操作など
運動スキル	運動一般の技能など
調査スキル	調べ学習、インターネット検索など
その他	

認知レベル

記憶スキル	知識などの記憶
読み取りスキル	文字、写真、映像などからの読み取り
確認スキル	計算演習など記憶や理解したことの確認
理解スキル	重要な点、関係などの理解
分析スキル	関係する要因などの分析
質問スキル	何故か、自分の意見などの質問
創作スキル	作文、音楽、美術などの創作
その他	

メタ認知レベル

計画スキル	実験、行事、課題などの計画を立てる
総合スキル	総合的にまとめたり、構造的に考察する
評価スキル	全体を評価して、自分の意見を述べる
協同スキル	他人と協調して、課題を遂行する
課題分析スキル	課題を下位の要素に分析する
課題解決スキル	課題を解決する策を提案する
議論スキル	論点を明らかにしながら、議論する
その他	

[Q10] 学生が夢・目標を持ち、学習習慣・学習スキルを培い、人間力を身につけるには、大学教員は現実には何をすれば良いとお考えでしょうか。

[回答] 一般的には、研究室やゼミにおける小集団における指導が適していると思います。それは講義室で、教えることは難しいからです。知識なら伝えることはできますが、人間力などは無理です。どうしても、指導教員、先輩、同僚、後輩などから学ぶ必要があります。教員が、大教室で講義しても、なかなか伝わりません。課題もありますが、やはり、研究室における緊密な指導、徒弟制が最も効果的だと思います。そこで、彼らは、目標をどうやって実現していくか、目標が高くて、挫折した時に、どうやって立ち上がるか、どう協力して目標に向かうか、という人間力の基礎を学びます。夢を持った学生は、強い。実に大きな力を発揮します。研究室に入って、良い先輩を見れば、勉強するなどと言っても、勉強するようになります。

1, 2年生で、大教室の講義で、どう指導したらいいかは難しく、私にはわかりません。この時期は、夢や目標がまだ未成熟で、自分の力も知っていないからです。本当に目標をもった学生は、1, 2年生でも、研究室を訪問しますが、それはまれな例です。

[Q11] 夢や学習習慣を持つ学生は、概ね基礎学力も高く、低偏差値大学には来ない場合が多いといわれます。そういう大学では、何ができるのでしょうか。

[回答] 本当にそのように言われているのかどうか、私は知りませんしデータも持っていません。学習習慣については、そのような傾向があるかもしれませんが、夢や目標と、基礎学力や偏差値とは、本当に相関があるのか、疑問であり、よく知りません。

偏差値の高いと言われる大学で、目標を失って、挫折する学生を良く知っていますし、偏差値が低い大学しか入れなかった学生が、大学では、逆に、偏差値の高い学生よりも、勉強することは、よく聞きます。私の経験では、上記の命題はあまり当てはまりません。

私の印象では、全体に偏差値や知識量を、高く評価しすぎていると思います。大学入学後、目標や課題意識の持ち方で、どうにでもなることが多いのです。入試成績や偏差値などが、どれほど大きな影響をもたらすかは、疑問です。

具体的な指導では、Q10と同じですが、研究室やゼミで、きわめて大きく学生は変容します。これほど伸びたかと思う学生もいれば、意欲を失い立ち上がれない学生もいます。それは、世の中と同じだと思います。人間同士のぶつかりしか、鍛えることができないと思います。私の場合は、ゼミや研究室の学生とは、2人3脚のイメージで一緒に相談し議論をしますが、内容にレベルの差はあるものの、鍛えるという意味では、偏差値の違いは、ありません。ゼミや研究室を持って、学生指導をした教員ならば、誰でも経験していると思います。

以上